研究ノート

顔回素描 ――『論語』と『史記』から――

井ノ口　哲　也

一、はじめに

われわれが、孔子またはその弟子たちの事績について調べようとする際、まず目を通すのが、『論語』と『史記』であろう。『論語』には孔子と弟子とのやりとりや孔子による弟子に対する評価などが載せられ、『史記』には孔子の伝記である孔子世家と弟子たちの伝記の集成である仲尼弟子列伝とが立てられており、通常、これらの資料に基づくことで、今日にいたる後世の様々な評価を経由しない、よりオリジナルの孔子またはその弟子たちの姿に肉薄できる、と考えられるからである（とはいうものの、『論語』と『史記』では成立年代に隔たりがあり、加えて、『論語』や『史記』の原文に対する私自身の理解も、今日までの研究成果の蓄積に恩恵を受けているのであるが…）。

本稿は、『論語』と『史記』に基づき、孔子の高弟である顔回について、その基本情報を提示し、顔回がどのような人物として伝えられているか、それを素描することを目的とするものである。なぜ顔回をとりあげるのか、その意義については、「六、おわりに」で述べることにしたい。

二、『論語』に見える顔回について（一）

『論語』には、顔回の関係するくだりが都合二十一ある。実は、孔子が顔回に対する評価を述べているくだりのほうが、顔回が孔子と会話を交わしているくだりや顔回が孔子への懐いを述べるくだりよりも、多いのである。そこで、本稿では、便宜上、孔子による顔回評価とそれ以外、この二つに分けて、『論語』における顔回の人物像を垣間見てみたい、と思う。

本節では、顔回に対する孔子の評価の言葉を見ていきたい。それらは全部で一三のくだりであるが、最初にそれらを列挙する。整理の都合上、冒頭に漢数字を付す。

【〇一】子曰、「吾与回言終日、不違如愚。退而省其私、亦足以発。回也不愚。」（『論語』為政篇[1]）

【〇二】子謂子貢曰、「女与回也孰愈。」対曰、「賜也何敢望回。回也聞一以知十、賜也聞一以知二。」子曰、「弗如也。吾与女弗如也。」（『論語』公冶長篇）

【〇三】哀公問曰、「弟子孰為好学。」孔子対曰、「有顔回者、好学、不遷怒、不貳過、不幸短命死矣。今也則亡、未聞好学者也。」（『論語』雍也篇[2]）

【〇四】子曰、「回也、其心三月不違仁、其餘則日月至焉而已矣。」（『論語』雍也篇）

【〇五】子曰、「賢哉回也。一簞食、一瓢飲、在陋巷。人不堪其憂、回也不改其楽。賢哉回也。」（『論語』雍也篇[3]）

【〇六】子曰、「語之而不惰者、其回也与。」（『論語』子罕篇[4]）

【〇七】子謂顔淵曰、「惜乎、吾見其進也、未見其止也。」（『論語』子罕篇[5]）

【〇八】子曰、「回也非助我者也、於吾言無所不説。」（『論語』先進篇[6]）

【〇九】季康子問、「弟子孰為好学。」孔子対曰、「有顔回者。好学、不幸短命死矣。今也則亡。」（『論語』先進篇[7]）

【一〇】 顔淵死。子曰、「噫、天喪予、天喪予。」（『論語』先進篇）

【一一】 顔淵死。子哭而慟。従者曰、「子慟矣。」子曰、「有慟乎。非夫人之為慟、而誰為慟。」（『論語』先進篇[8]）

【一二】 顔淵死。門人欲厚葬之。子曰、「不可。」門人厚葬之。子曰、「回也視予猶父也、予不得視猶子也。非我也、夫二三子也。」（『論語』先進篇[9]）

【一三】 子曰、「回也其庶乎、屢空。賜不受命而貨殖焉、億則屢中。」（『論語』先進篇[10]）

これらを大まかに分けると、【〇一】【〇六】【〇八】は、孔子が顔回と話をしていて感じとった顔回の優秀さを示すもの、【〇二】【〇四】は他の弟子と比較した場合に顔回がずば抜けて優秀であることを示すもの、【〇五】【一三】は生活が窮乏しても精進している顔回の様子を伝えるもの、【〇七】は「進」むばかりで「止」まるのを知らないほど学問に精進する顔回の様子を伝えるもの、【一〇】【一一】【一二】は顔回の死に接しての孔子のリアクション（【〇七】もそのようである）、【〇三】【〇九】は顔回の死後に学問に熱心だった顔回の様子を語る孔子のことば、ということになろう。

これらが、いずれも、顔回本人が居合わせない場面で語られた、と考えるのであれば、『論語』の中で、顔回に関する客観的な評価を記したもの、ということになろう。

三、『論語』に見える顔回について（二）

次に、本節では、前節でとりあげたもの以外の『論語』の顔回関連箇所、すなわち、顔回が孔子と会話を交わしているくだりや顔回が孔子への懐いを述べるくだりを見ていくことにしよう。それら六つを列挙することにしたい。

【一四】 顔淵・季路侍。子曰、「盍各言爾志。」子路曰、「願車馬衣軽裘、与朋友共、敝之而無憾。」顔淵曰、「願無伐善、無施労。」子路曰、「願聞子之志。」子曰、「老者安之、朋友信之、少者懐之。」（『論語』公冶長篇[11]）

【一五】 子謂顔淵曰、「用之則行、舎之則蔵、唯我与爾有是夫。」子路曰、「子行三軍、則誰与。」子曰、「暴虎馮河、死而無悔者、吾不与也。必也臨事而懼、好謀而成者也。」（『論語』述而篇[12]）

【一六】 顔淵喟然歎曰、「仰之彌高、鑽之彌堅、瞻之在前、忽焉在後。夫子循循然善誘人。博我以文、約我以礼。欲罷不能、既竭吾才、如有所立卓爾、雖欲従之、末由也已。」（『論語』子罕篇[13]）

【一七】 子畏於匡。顔淵後。子曰、「吾以女為死矣。」曰、「子在、回何敢死。」（『論語』先進篇[14]）

【一八】 顔淵問仁。子曰、「克己復礼為仁、一日克己復礼、天下帰仁焉、為仁由己、而由人乎哉。」顔淵曰、「請問其目。」子曰、「非礼勿視、非礼勿聴、非礼勿言、非礼勿動。」顔淵曰、「回雖不敏、請事斯語矣。」（『論語』顔淵篇）

【一九】 顔淵問為邦。子曰、「行夏之時、乗殷之輅、服周之冕、楽則韶舞。放鄭声、遠佞人。鄭声淫、佞人殆。」（『論語』衛霊公篇[15]）

このうち、【一四】【一七】【一八】【一九】は、孔子とのやりとりである。【一五】も、その一場面であり、孔子が顔回に語りかけたにもかかわらず子路との応答になってしまっている。【一六】は、顔回が孔子への懐い（尊敬と感謝の念と捉えてよいであろうか）を吐露したものである。

前節と本節に引用した『論語』の文章から明確に分かるのは、顔回は、孔子に忠実に仕える優秀で模範的な弟子であった、ということである。いくつもの文章を検討していて、結局、浮き上がってくるのは、どこまでも真面目な顔回像でしかない。

残りの二つのくだりであるが、それらは、

【二〇】徳行、顔淵・閔子騫・冉伯牛・仲弓。言語、宰我・子貢。政事、冉有・季路。文学、子游・子夏。（『論語』先進篇）[16]

とあるように、いわゆる孔門四科の紹介の中で顔回の名に言及があるくだり、そして、

【二一】顔淵死。顔路請子之車以為之椁。子曰、「才不才、亦各言其子也。鯉也死、有棺而無椁。吾不徒行以為之椁。以吾従大夫之後、不可徒行也。」（『論語』先進篇）[17]

とあるように、顔回の死後にその父である顔路と孔子がやりとりした様子が示されるくだり、である。以上で、『論語』に見える顔回に関するくだりは、都合二一である。

四、『史記』に見える顔回について（一）——孔子世家——

では、ここからは、『史記』に見える顔回について考察する。本節では、孔子世家で顔回に言及される四つの文章を見ていくことにしたい。特に前々節・前節で引用した『論語』の表現を用いているものに関しては、いちいち言及することにする。

まず一つめの文章は、

将適陳、過匡、顔刻為僕、以其策指之曰、「昔吾入此、由彼缺也。」匡人聞之、以為魯之陽虎。陽虎嘗暴匡人、匡人於是遂止孔子。孔子状類陽虎、拘焉五日。①顔淵後、子曰、「吾以汝為死矣。」顔淵曰、「子在、回何敢死。」……。

というものであるが、傍線部①は、【一七】を踏まえたものである。

二つめの文章は、やや長い。

孔子知弟子有慍心、乃召子路而問曰、「『詩』云「匪兕匪虎、率彼曠野」。吾道非邪。吾何為於此。」子路曰、「意者吾未仁邪。人之不我信也。意者吾未知邪。人之不我行也。」孔子曰、「有是乎。由、譬使仁者而必信、安有伯夷・叔斉。使知者而必行、安有王子比干。」

子路出、子貢入見。孔子曰、「賜、『詩』云「匪兕匪虎、率彼曠野」。吾道非邪。吾何為於此。」子貢曰、「夫子之道至大也、故天下莫能容夫子。夫子蓋少貶焉。」孔子曰、「賜、良農能稼而不能為穡、良工能巧而不能為順。君子能脩其道、綱而紀之、統而理之、而不能為容。今爾不脩爾道而求為容。賜、而志不遠矣。」

子貢出、顔回入見。孔子曰、「回、『詩』云「匪兕匪虎、率彼曠野」。吾道非邪。吾何為於此。」顔回曰、「夫子之道至大、故天下莫能容。雖然、夫子推而行之、不容何病、不容然後見君子。夫道之不脩也、是吾醜也。夫道既已大脩而不用、是有国者之醜也。不容何病、不容然後見君子。」孔子欣然而笑曰、「有是哉顔氏之子。使爾多財、吾為爾宰。」

ここでは、子路・子貢・顔回の順で不平不満を問う同じ問いが繰り返されるのだが、子路・子貢と比べて、顔回は孔子の意を得た回答をすることによって、弟子の中でもひときわ優秀であることが示されている。

三つめの文章は、

②子貢曰、「夫子之文章、可得聞也。夫子言天道与性命、弗可得聞也已。」③顔淵喟然歎曰、「仰之彌高、鑽之彌堅。瞻之在前、忽焉在後。夫子循循然善誘人、博我以文、約我以禮、欲罷不能。既竭我才、如有所立、卓爾。雖欲従之、蔑由也已。」……。

というものだが、傍線部②は『論語』公冶長篇の文章を、傍線部③は【一六】を、それぞれ踏まえている。

四つめの文章は、

④顔淵死、孔子曰、「天喪予。」

であるが、傍線部④は、【一〇】を踏まえたものである。

四つの文章を読むかぎり、少なくとも『論語』のみが情報源ではない、ということは分かる。もっとも、孔子世家の論賛に、「余読孔氏書、想見其為人。」とあることからは、「太史公」は『論語』以外の書籍から情報を得た、ということであろう。二つめのやや長い文章は、それから採録されたものであろう。

五、『史記』に見える顔回について（二）——仲尼弟子列伝——

次に、仲尼弟子列伝における顔回の記事を見ていく。やはり『論語』を踏まえた表現に注意しておこう。仲尼弟子列伝は、以下の文言で始まる。

孔子曰「受業身通者七十有七人」、皆異能之士也。⑤徳行、顔淵・閔子騫・冉伯牛・仲弓。政事、冉有・季路。言語、宰我・子貢。文学、子游・子夏。⑥師也辟、参也魯、柴也愚、由也喭、回也屢空。賜不受命而貨殖焉、億則屢中。

傍線部⑤は【二〇】を踏まえたものであり、傍線部⑥は『論語』先進篇の文章（部分的に【一三】を含む）を踏まえたものである。

仲尼弟子列伝では、この直後に孔子が尊敬した人物に関する文章が続き、その後、孔子の弟子たちの伝記が始まる。その劈頭が、顔回の伝記である。このことは、『史記』が（あるいは『史記』成立時点での知識人の大方の評価として）顔回を孔子の筆頭弟子であると認めたことを示していよう。

以下は、『史記』仲尼弟子列伝における顔回伝の全文である。

顔回者、魯人也、字子淵。少孔子三十歲。

⑦顔淵問仁、孔子曰、「克己復礼、天下帰仁焉。」

孔子曰、⑧「賢哉回也。一簞食、一瓢飲、在陋巷、人不堪其憂、回也不改其楽。」⑨「回也如愚。退而省其私、亦足以発、回也不愚。」⑩「用之則行、捨之則蔵、唯我与爾有是夫。」

回年二十九、髪尽白、蚤死。⑪孔子哭之慟、曰、「自吾有回、門人益親。」⑫魯哀公問、「弟子孰為好学。」孔子對曰、「有顔回者好学、不遷怒、不貳過、不幸短命死矣、今也則亡。」

傍線部⑦は【一八】を、傍線部⑧は【〇五】を、傍線部⑨は【〇一】を、傍線部⑩は【一五】を、傍線部⑪は【一一】を、傍線部⑫は【〇三】を、それぞれ踏まえている。仲尼弟子列伝における顔回伝は、圧倒的に『論語』からの情報で構成されている。このことは、仲尼弟子列伝の論賛に「余以弟子名姓文字悉取『論語』弟子問并次為篇、疑者闕焉。」とあることからも明らかである。

ただ、顔淵の死については、『論語』は「短命」ということくらいしか述べていないが、『史記』は「回年二十九、髪尽白、蚤死。」という情報を記している。『論語』に基づかないこの情報が、後世、ひとりあるきして尾鰭が付くことになるのだが、それについては、別稿で検討することにしたい。

六、おわりに

以上、本稿では、『論語』と『史記』の記述に基づいて、顔回という人物の素描を試みた。その結果、『史記』の顔回に関する記述は、おおむね『論語』の記述を下敷きにしていることが理解された。これは、『史記』が何の情報を拠り所にして孔子世家および仲尼弟子列伝を執筆しているか、を考えるための一つの手がかりを提供するものでもある。[18]

顔回をめぐっては、『上海博物館蔵戦国楚竹書』第八冊（未入手。本稿執筆の時点では未刊のようである）に「顔淵問於孔子」という一篇が含まれると聞いている。また、漢代のあと、儒家が再び勢いをとりもどす宋代にも、とりわけ朱熹が道統に

顔回を列したことに現われているように、顔回が顕彰される。[19] さらに、現代でも、中国大陸では、顔氏（顔子）専門の研究論文集や国際学会が確認され、とりわけ多く顔回に関する討論が行われているのも事実である。[20] こうした事を考えると、ここで『論語』と『史記』に基づいて、顔回に関する初歩的考察をおこなっておくことには、後世のフィルターをできるだけ通さずに、より正確に顔回という人物を捉えるうえで、一定の意義が認められるであろう。加えて、儒家以外の諸子（たとえば『荘子』）への影響も併せて考える必要もある。すなわち、今後も、顔回に注目する価値や意義があるということである。師である孔子も能力的にかなわないと認めた顔回は、経学が盛んであった後漢時代に、孔子と同じ聖人とはみなされなかったけれども、（経書の文言を検討する学問である経学とまでは言えなくとも）少なくとも儒学を支えてきた立役者の一人であることには間違いないのである。顔回は、もっと注目されてしかるべきであろう。そういった意味を込めて、甚だ素描に徹した嫌いはあるが、駄文を草した所以である。

二〇一〇年九月三〇日　擱筆
二〇一一年二月一二日　補筆

注

（1）いま本文においては『論語』の底本は藝文印書館本を用いて、印刷の都合上、日本の常用漢字を中心に表記しいるが、以下、注においては、河北省文物研究所定州漢墓竹簡整理小組『定州漢墓竹簡　論語』（文物出版社、一九九七年七月）に拠り、該当するものがある場合、現存最古の『論語』の文言を掲げることにする。現状では、これが『論語』のオリジナルにより近いものと考えられるからである。

【〇一】に関しては、以下の文言が現存最古の『論語』の文言として伝えられている。

〔子曰、〕吾與回言終日、不違、〔如〕愚。退而省其私、亦足（第一四号簡）……

(2) 現存最古の『論語』の文言として、以下のものが伝えられている。
〔哀公〕問、弟子孰為好學。孔〔子對曰、〕有顔回者好學、(第一一〇号簡)……過。不幸短命死矣、今也則亡、未聞好學者也。(第一一一号簡)

(3) 現存最古の『論語』の文言として、以下のものが伝えられている。
子曰、賢哉、回也。一單食、一(第一二〇号簡)……

(4) 現存最古の『論語』の文言として、以下のものが伝えられている。
……不隋者、其回也與。(第二三二号簡)

(5) 現存最古の『論語』の文言として、以下のものが伝えられている。
子□□□□□□吾見其進也、未見其止也。(第二三三号簡)

(6) 現存最古の『論語』の文言として、以下のものが伝えられている。
子曰、回〔也非助我者也、於〕吾言無所不説。(第二六三号簡)

(7) 現存最古の『論語』の文言として、以下のものが伝えられている。
……短命死矣、今也則亡。(第二六五号簡)

(8) 現存最古の『論語』の文言として、以下のものが伝えられている。
〔顔淵死、子哭之動。從者曰、子動矣。曰〕(第二六九号簡)

(9) 現存最古の『論語』の文言として、以下のものが伝えられている。
〔顔淵死、門〕人欲厚葬之。子曰、不可。(第二七〇号簡)……〔回〕也視予猶父也、予不〔得視□子也。非我也、夫二三〕(第二七一号簡)

(10) 現存最古の『論語』の文言として、以下のものが伝えられている。
孔子〔曰、回也其庶乎〕、(第二八二号簡)居空。賜〔不受命〕、○貨殖焉、意則居中。(第二八三号簡)

(11) 現存最古の『論語』の文言として、以下のものが伝えられている(但し、字体の都合上、引用は顔回の発言の部分にとどめる)。
顔淵曰、願毋伐□、毋□(第一〇四号簡)

(12) 現存最古の『論語』の文言として、以下のものが伝えられている。
〔謂顔淵曰、用則行、舍之則臧、唯〕(第一四四号簡)……路曰、子(第一四五号簡)……子曰、暴虎馮河(第一四六号簡)……〔吾弗〕與也。必也臨事而懼、好謀而成者□。(第一四七号簡)

(13) 現存最古の『論語』の文言として、以下のものが伝えられている。

〔淵喟然嘆曰、〕仰之迷高、□□迷堅。瞻之在前、忽（第二二二号簡）……〔然善牖人、博〕我以文、約我以禮、（第二二三号簡）……〔雖。雖欲從之、未由也〕〔已〕。（第二二四号簡）

(14) 現存最古の『論語』の文言として、以下のものが伝えられている。

子畏於匡、顔淵後。子曰、吾以女為死矣。曰、子在、回何敢（第二九〇号簡）……

(15) 現存最古の『論語』の文言として、以下のものが伝えられている。

……曰、行夏之□、乘殷之路、服周之絻、〔樂則□〕（第四二五号簡）〔『武』。放鄭聲、遠年人。鄭聲淫、年人殆〕。（第四二六号簡）

(16) 現存最古の『論語』の文言として、以下のものが伝えられている。

……淵、閔子騫、冉伯（第二六一号簡）……有、子路。文學。子〔游・子夏〕。（第二六二号簡）

(17) 現存最古の『論語』の文言として、以下のものが伝えられている。

顔淵死、顔路請子之〔車〕□□□□孔子曰、材不材、（第二六六号簡）……言其子也。鯉也死、有棺無郭。吾不徒行以為之郭。（第二六七号簡）從大夫之後也、吾不可（第二六八号簡）……

(18) 本文中でも多少言及したが、以下に孔子世家と仲尼弟子列伝それぞれの論賛の全文を掲げ、『史記』が拠り所とした情報を知るためのよすがとしたい。

太史公曰、『詩』有之、「高山仰止、景行行止。」雖不能至、然心鄉往之。余読孔氏書、想見其為人。適魯、観仲尼廟堂車服禮器、諸生以時習禮其家、余祗廻留之不能去云。天下君主至于賢人衆矣、当時則栄、没則已焉。孔子布衣、伝十餘世、学者宗之。自天子王侯、中国言六藝者折中於夫子、可謂至聖矣。（『史記』孔子世家・論賛）

太史公曰、学者多称七十子之徒、誉者或過其実、毀者或損其真、鈞之未覩厥容貌、則論言弟子籍、出孔氏古文近是。余以弟子名姓文字悉取『論語』弟子問并次為篇、疑者闕焉。（『史記』仲尼弟子列伝・論賛）

(19) 土田健次郎『道学の形成』（創文社、二〇〇二年一二月）、柴田篤「「顔子没而聖学亡」の意味するもの――宋明思想史における顔回――」（『日本中国学会報』第五十一集、一九九九年一〇月）。

(20) 研究論文集の一例として、于聯凱・顔世謙主編『顔子研究論叢』（斉魯書社、二〇〇三年五月）を、国際学会の一例として、第十一届世界顔氏聯誼大会（成都で二〇一〇年一〇月九日～一〇月一一日に開催）を、それぞれ挙げておく。

〔付記〕
本稿は、平成二二（二〇一〇）年度文部科学省科学研究費補助金（研究課題「後漢経学の基礎的研究」、課題番号 21720014）における研究成果の一部である。